

書名 「ソ連・ロシアと世界平和」



著者 総合科学部
社会文化研究講座 ◆ 岩田賢司



著者プロフィール

- ◆ (いわた・けんじ)
- ◆ 一九四八年生まれ
- ◆ 一九八二年一橋大学大学院博士課程後期単位取得後退学
- ◆ 一九九一年法学博士(一橋大学)
- ◆ 専攻 国際政治学。ソ連ロシア政治外交論

要約

戦後五十年という節目の年を迎え、今後の世界平和を考える際に参考となる著書として本書を紹介します。

著者である岩田教授は、保守派クレーダーやソ連邦の解体があつた一九九一年にちょうどモスクワに留学しておられ、あの歴史的転換を目撃された数少ない日本人政治学者の一人です。氏のこれまでのソ連・ロシア研究の成果に、そのときの体験を加えて、本書はソ連邦の解体とそれ以後の混乱、さらには将来展望について、わかりやすく解説している。

まずロシア帝国の成立から始まり、スターリンによる少数民族追放政策に至るまで、旧ソ連邦内で民族の自由が奪われ、民衆に不満が蓄積していたという、ソ連邦解体前夜の状況が述べられている。クーデター事件前にすでにロシア共和国が主権宣言を行い、旧ソ連邦内の諸共和国を事実上見捨てたこと、また諸共和国はロシア大国主義の台頭に脅えて独立宣言をしたこと、これをソ連帝国解体の根本原因だとしている。

解体後の諸共和国はソ連邦時代の名残を引きずっているため、まだ経済的に自立できないためロシアと連合する動きが一方にあり、他方過去の怨念(民族問題)も尾を引いて、政治的にはロシアに従属したくないという意識が強い。なかでも、旧ソ連諸国に残留

するロシア人同胞の保護を名目に、旧ソ連国境をロシアの国境とみなすロシアの軍事ドクトリンにウクライナなどが反発を強め、西側もロシアの大国主義外交に警戒を強めるなど、新生ロシアと世界との新しい国際関係が定まらないことが問題となっている。

一方、ロシア国内でもエリツィン政権が混迷をきわめ、極右台頭の危険性、チエチェンにみられるようにロシア連邦の一体化を力で維持するための軍事介入、さらには核管理能力の問題等が指摘されている。

最後に、ソ連・ロシアの安定化化には今後の世界平和はあり得ないという視点から、ロシア支援の現状と旧ソ連の核問題について述べている。結局、「ロシアが変革を成し遂げ、世界平和が確固たるものになるためには、ロシア国民の自助努力と、世界各国の創造力あふれる外交を待つしかないでしょう。創造力や想像力のある人であれば、個人としてもそのために何をなし得るか、知恵を出し合うことができるかもしれせん」と結び、若い世代(特に大学生)に問題を投げかけている。

(広報委員 安藤正昭 記)

A5判、一二四頁で、一冊六百円
(財団法人広島文化センター発行)。
広島大学生協西2コープショップと
広島市中区原爆資料館東館売店(T
EL 082-241-5246)で
販売している。